後期青年期女性のアイデンティティ探索における心的安全空間の広がり：心的安全空間としての自己身体接触の多様化の事例を通じて

Widening of Psychologically Safe Space in Ego Identity Search of Late Adolescent Female: Increased Diversity in the Way of Body Touching as Psychologically Safe Space

ジェイムス朋子 JAMES, Tomoko
● 国際基督教大学高等臨床心理学研究所
Institute for Advanced Studies of Clinical Psychology, International Christian University

揖斐　衣海 IBI, Emi
● 国際基督教大学高等臨床心理学研究所付属心理相談室
Psychological Consulting Services, Institute for Advanced Studies of Clinical Psychology, International Christian University

生井　裕子 IKUI, Yuko
● 国際基督教大学教育学研究科
Graduate Schoo of Education, International Christian University

荻本　快 OGIMOTO, Kai
● 国際基督教大学教育学研究科
Graduate School of Education, International Christian University

苫米地　憲昭 TOMABECHI, Noriaki
● 国際基督教大学高等臨床心理学研究所
Institute for Advanced Studies of Clinical Psychology, International Christian University

Keywords 後期青年期，心的安全空間，自己身体接触，アイデンティティ
late adolescence, psychologically safe space, body touching, ego identity

ABSTRACT

本研究は，青年期のアイデンティティ追求時の人格成熟過程において，人格発達に資する葛藤への取り組み作業に対して身体が心的安全空間として機能することを明らかにし，その際の心的安全空間の多様化のプロセスを捉えることを目的とした．実験的アイデンティティ・グループの参加者に対して行った心的安全空間質問紙の結果から，青年群と大人群の特徴を比較した上で，前者の特徴が見られた後期青年期女性の観察研究を行った．理論仮説は，①青年期のアイデンティティ追求において，身体の心的安全空間は重要な土壌となる．②身体の心的安全空間は，心的安全空間の階層性が成立することにより多様化し，さらにそのサブシステムである個人内領域の心的安全空間も拡大する，とした．①は支持され，②は概ね支持された．揺らぎを経験する青年期に，最も安定した心的安全空間の一つとして身体が機能することで，スープラ・システムの心的安全空間は拡大し，同時に個人内の心的安全空間も拡大することが示された．

This study aimed to demonstrate that the sense of body plays as a psychologically safe space in working on complexes which contribute to personality development through adolescent's identity seeking and to elucidate how the psychologically safe space become diverse. First, the Psychological Safe-Space Questionnaire was conducted on participants at the experimental Identity Group. The data was classified into an adult group and adolescent group to compare characteristics. Then, an observable study on one late adolescent female who represented the characteristics of the adolescent group was conducted. Theoretical hypotheses were; (1)Psychologically safe space of the sense of body lay a foundation for adolescent's identity seeking, (2)Psychologically safe space of the sense of body diversifies as the hierarchy of the psychologically safe space is formed, leading to the widened psychologically safe space of the intra-psychic sphere. The first theoretical hypothesis was supported, and the second was largely supported. In conclusion, at times of adolescent turbulence, if the sense of body is confirmed as one of the most stable psychologically safe space, psychologically safe space of its supra system as well as the intra-psychic psychologically safe space widen.

1. 問　題

青年期は，初期の衝動の量的増加から，その質の変化を経て（Blos, 1962），生物学的に成熟した個人は，青年期後期に社会の中で自己を定義づけ，アイデンティティの確立が課題となる．青年期後期のこの課題は，社会的，現実的な圧力と，内的派生物が合流する結果生じるとされている（Ritvo, 1971）．同時にこの時期，発達する力と退行する力との力動的相互作用を伴うため，発達のための退行も生じると言われている（狩野，1990）．また，生物学的な生殖機能の完成に伴う発達的な人格構造の再体制化の課題に伴って，アイデンティティの揺らぎが生じる（小谷・中村・秋山・橋本，2001）こともままあることである．まとめるならば，自我は揺らがされ，青年らしい勢いある成長への力と，勢いゆえに反動として退行する力との，両方の力動的相互作用を通じて，青年期は自分の生物学的身体，心理内的世界，外的社会に対する自我の主体的な関与を再編成する時期であると言うことができよう（ジェイムス，2007a）．

この時期，青年がアイデンティティを変革し，再構成していくための土壌として，潜伏期の産物

を青年期初期につないでいくという意味で，古くから身体の重要性が指摘されてきている（ジェイムス，2007b）.

Freud（1923）は自我について，なによりも先に身体的自我があり，欲動は身体的な現象であると述べているが，それがもっとも飛躍的に成長するのが潜伏期である．潜伏期において，子どもは衝動や感性を思い切り用いることで，内的な世界に馴染み，この体験を通じて，身体レベルでの自己所有性とそれに基づく主体性，安全感を体験的に知ることになる（西村，2007）．身体はもっともはっきりと自己のバウンダリーを体験できる媒体となり，身体性に基づく自己主体感は，攻撃性や性愛性のエネルギーに対する主体性を醸成するために重要な機能を果たす．そして，青年期に試行錯誤しながらアイデンティティを変革し，再構成していくための土台となるのである（ジェイムス，2007b）.

一方，不安や危機に際して現実にとどまり続け，個人が成長に向かう際に用いる心性を指す概念として，「心的安全空間」がある（小谷，2005）．心的安全空間とは「個人がいかなる脅威や怖れからも自由でいられる空間」と定義されている．個人の精神内世界と言われる内的世界の事象でもあり，外的現実世界の事象でもある（小谷，2005）ものとされており，この心的安全空間の発達的な流れは，身体レベルで感じる安全空間から始まるとして，身体の重要性が論じられている（小谷，2005）.

さらにこの概念は，集団精神療法における安全空間の体験の認知として，集団精神療法理論と，精神分析的システムズ理論に依拠した人格構造モデルによって，その構成概念が定式化され，その成果として心的安全空間体験質問紙が作成されている（小谷・佐柳・中村・川村・武野・髭・栗田・雨宮，2005）．その構成概念としては，質問紙に回答する個人をターゲットシステムとした時に，1）スープラシステム，2）対人関係システム，3）個人内（精神内的）システムにおけるシステムの階層性が想定されている．より具体的には，スープラ領域には，部屋（物理的空間構造），グループ，グラウンドルール，目標があり，個人の精神内的領域と対人関係領域を超えたものである．対人関係領域には，セラピストとメンバーがあり，個人システムとその関係に感じる安全空間を示す．個人内的領域には，身体，心的空間，怒り，愛情，内的対象，未知の世界がある．なお，怒りと愛情は，精神分析における２大衝動である，攻撃性と性愛性のエネルギーに対して安全空間を体験していることを意味する．この中でも，身体は，個人の心的安全空間の一構成要素として捉えられている.

青年期における心的安全空間の獲得プロセスに関しては，James, Hoshino, Katsumata & Hara（2006）が，青年期臨床における集団精神療法において，心的安全空間は質的，量的に拡大することを指摘し，心的安全空間の階層性が成立することにより，質的・量的に拡大するという変化促進メカニズムを有することを示した．また，心的安全空間の変化は一度に生じるものではなく，スープラシステムとしてのグループなどが心的安全空間となることにより，そのサブシステムとしてのセラピストやメンバーなどが心的安全空間と変化し，それが多層的に繰り返されることで，心的安全空間は質的に拡大すると述べた．また，心的安全空間の在り方は，固定的なものではなく，退行的なもの，防衛的なもの，適応的なものなど，多様であることを明らかにした.

以上概観してきたようにアイデンティティ追求における身体性の重要性と，心的安全空間の体験の認知としての身体の重要性が述べられてきたが，それでは、それは実際にはどのように現れるものであろうか．その表れを実際に捉えている研究は少ないのだが，Reich（1931）は，心理療法，日常生活問わず，外的世界や衝動を前にする際に，「性格の鎧」が痛みを避けて，心的均衡を作り出し，心の保護的なメカニズムとして働くとして，話し方，態度，行動の仕方などに表れるとした．また小谷ら（2005）は，このような個人の防衛的な行動や態度も個人の心的安全空間とした上で，それらは表出されるも

のとして捉えた．身体に関しては，安全感と身体接触の関係が述べられている．愛着理論を提唱したBowlby（1969）は，子どもが驚きやショックを感じている時に，身体的接触を求めるとした．人間行動科学者のMorris（1977）も，人間が不安を持ったときに起きる観察可能な反応として，大人が自分の腕で自分の身体を抱きしめる身体接触が起きることを見出した．身体の中の皮膚が持つ機能についてまとめているものもある．Anzieu（1985）は，比較行動学，集団研究，投射テスト，皮膚科学などの理論から，皮膚に心的現象としての自我の生成にまつわる9つの機能を認めている．それらの中には，①身体的なものだけでなく心的なものを内部に保つコンテイナー（容器）となる，②外界からの刺激に対する保護装置となる，③外部との境界として個別性を保有する，④乳児の皮膚の場合は母のリビドーの受容器となり，これを通じて人の皮膚は性的興奮を支える表面となる，などがある．以上から，心的安全空間としての身体の表れの1つとして自己身体接触があると言えよう．

2. 目　的

後期青年期は発達的な力と，退行する力が働く中で，アイデンティティの探求を行う時期である．これまで，この人格構造全体の再体制化が行われる中で，性愛性や攻撃性のエネルギーに対する主体性を再構築するために，身体性が重要な役割を果たすことが指摘されてきた．しかし，その表れを実際に捉えている研究は少ない．そこで，本研究では，アイデンティティ追求を目指して行われた実験的アイデンティティ・グループに参加する青年に対し，まず心的安全空間質問紙によって大人群との比較によりその特徴を確認した上で，さらに，典型一事例を取り上げ，観察研究により，その一端を明らかにすることを目的とする．すなわち，青年期のアイデンティティ追求時の人格成熟過程において，人格発達に資する葛藤への取り組み作業に対して身体が心的安全空間として機能することを明らかにし，その際の心的安全空間の多様化のプロセスを捉えることを目的とする．

2. 1　理論仮説

上記の目的を明らかにするため，仮説として，以下の2点を置いた．それぞれ，まずその傾向を量的研究により明らかにした上で，個人事例の観察研究により，それがどのようなプロセスを経て成立するのかを検討する．

1. 青年期のアイデンティティ追求において，身体の心的安全空間は重要な土壌となる．
2. 身体の心的安全空間は，心的安全空間の階層性が成立することにより多様化し，さらにそのサブシステムである個人内領域の心的安全空間も拡大する．

2. 2　作業仮説

まず，量的研究により，下記作業仮説の検討により，大人群との比較によって青年期のアイデンティティ追求時における心的安全空間の体験認知の特徴の傾向を明らかにする．

作業仮説 1-1-1　心的安全空間質問紙において，青年群は大人群よりも「身体」の項目のチェック率が，高くなるだろう．

作業仮説 2-1-1　心的安全空間質問紙において，青年群はスープラ領域もしくは対人関係領域の項目のチェック率が高くなると，個人内領域の「身体」「怒り」「愛情」のチェック率が高くなるだろう．

さらに，上記の特徴が確認された典型事例をとりあげ，観察研究により，身体の心的安全空間を取り出す上での質問紙の限界を補うため，以下の作業仮説の検討を行う．なお，本研究では，身体の心的安全空間の表れとして，身体表出のひとつとしてしばしば見られる自己身体接触を取り上げることとする．

作業仮説 2-2-1　心的安全空間質問紙にチェックされる項目の多様化し，スープラ領域も

しくは対人関係領域の項目がチェックされるセッションでは，観察で確認できる，自己身体接触に現れる身体に対する心的安全空間においても連動して多様化することが見られる．

作業仮説 2-2-2 自己身体接触に表れる身体に対する心的安全空間の多様性が増したセッションでは，心的安全空間質問紙において個人内領域である「怒り」と「愛情」の項目がチェックされ，かつ，セッション内においては，自身の怒りや愛情のエネルギーをアイデンティティ追求に向けて探求する姿が見られるであろう．

3. 方　法

上記作業仮説 1-1-1，2-1-1 の検討においては，20XX 年，3 日間の宿泊形式で行われた，青年期の人格発達を目指したアイデンティティ・グループの参加者青年期 14 名，成人期 6 名を対象とした．対象者は事前に面接を行い，健康な青年期の人格構造を査定するために実施した半構造化面接法「Assessment of Identity Functions for Adolescents; AIFA（自己概念の統合，重要な他者概念の統合，性愛性と攻撃性の分化・統合，エディプス葛藤の様態，統合され成熟した超自我，の 5 項目およびその下位項目から構成)」(橋本・秋山・中村・小谷，2003）において，健康な人格構造を持っていることを確認した．セッションは合計 8 セッション行われ，各セッション終了後毎に，13 項目から構成される心的安全空間体験質問紙（小谷・佐柳・中村・川村・武野・髭・栗田・雨宮，2005）を実施し，「はい」にチェックした項目を順位付けし，チェック傾向を順位により分析した．その際に，項目ごとに，小谷(2005) の分類に従い，スープラ領域（部屋，グループ，ルール，目標)，対人関係領域（セラピスト，メンバー)，個人内領域（身体，内的空間，怒り，愛情，内的対象，未知，外）に分類した上で各項目，領域ごとのチェック率を求めた．チェック率は，本質問紙の平均チェック率であり，妥当性があるといわれる 5 項目を基準に，さらに，より明確に体験された項目として 3 項目内のチェック率も算出した．

さらに，上記作業仮説 2-2-1 および 2-2-2 の検討するために，上記作業仮説 1-1-1，2-1-1 の傾向が見られた一事例（以下，C 子とする）を典型事例として選定し，セッション中における身体接触行動をライブ観察者 2 名（臨床心理士および臨床系大学院生）とビデオ観察者 1 名（臨床系大学院生)の合計 3 名によって観察した．観察データは，Morris（1977）の記述と Gendlin（1996）の記述を参考に，腕領域の接触と，胴体領域の接触を想定していたが，実際の観察場面で見られたその他の身体接触に関しても記録を取り，全セッション終了後，観察者 3 名の評定によって，身体の部位毎に 6 領域，椅子を接触したものを体外領域に分類し，全 7 領域とした．なお，データ化の際には，1 発話中に現れた行動を 1 つの表出としてカウントし，量的にデータ化して分析した．データ化した観察結果とあわせ，C 子の心的安全空間質問紙の推移を検討すると共に，作業仮説 2-2-2 の検討のために，最も自己身体接触の多様性のあるセッションとないセッションの概要の比較を行った．

4. 結　果

1. 心的安全空間体験質問紙へのチェックのうち，上位 5 項目，および 3 項目のチェック率について，青年と成人に分けて集計をした．「身体」項目のチェック率を，青年と成人ごとに図 1（上位 5 項目)，図 2（上位 3 項目）に示す．

データを比較すると，上位 5 項目によるチェック率では，「身体」項目の平均値は青年群は 2% のみ成人期よりも高い．しかし，内訳をみてみると，大人群はセッション #2 において 83% と著しく高いチェック率となっており，それが平均値を引き上げていることがわかる．同様に上位 3 項目によるチェック率を見ると，全セッションの平均で青年群は 24%，大人群は 17% であり，

大人群の #2 が突出してチェック率が高くなったものを考慮しても，青年群は大人群よりも「身体」項目のチェック率が高くなったことが確認された．よって，作業仮説 1-1-1 は支持された．

2. 作業仮説 2-1-1 を検討するため，青年期のスープラ領域，対人関係領域，および個人内領域，「怒り」「愛情」「身体」項目への上位５項目と上位３項目のチェック率をそれぞれ図３と図４に示した．

上位５項目までのデータより，セッションが後半になるにつれ，対人関係領域のチェック率が増したことがわかる．それに比例するように「怒り」「愛情」項目のチェック率は増した．スープラ領域と「怒り」「愛情」項目の連動はみられなかった．「身体」項目へのチェック率は，14%-50% の間を変動し，スープラ領域や対人関係領域とも連動していなかった．むしろ，対人関係領域のチェック率が高まるにつれて，身体へのチェック率はどちらかというと低くなるような傾向が見られた．

上位３項目までのデータからも，対人関係領域のチェック率は後半にかけて高くなり，一方，スープラ領域の変動はあまりみられなかった．上位５位項目と異なるのは，身体項目のチェック率の変動が #5 を除いて緩やかとなった点と，「怒り」「愛情」項目がほぼ一定に推移した点である．

上位５項目のデータから，スープラ領域のチェック率が高まると，「怒り」「愛情」項目のチェック率が高くなったことは確認された．しかし，「身体」項目のチェック率は，連動しない結果となった．そのため，作業仮説 2-1-1 は部分的に支持された．

3. 作業仮説 1-1-1，2-1-1 より，青年期の特徴として，身体へのチェック回数が多く，対人関係領域でのチェック回数が多くなる事がわかっ

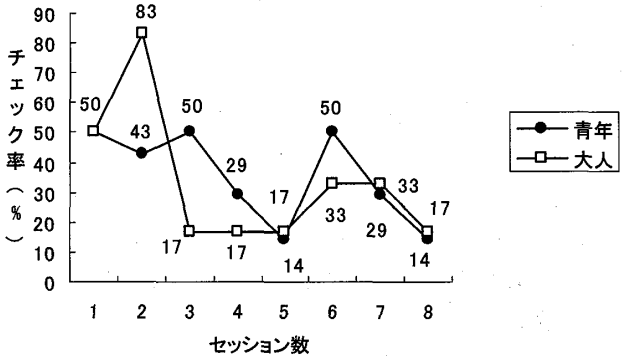

図１　身体領域チェック率（５位まで）

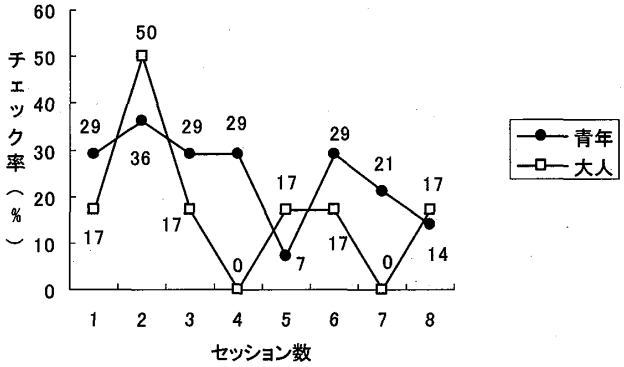

図２　身体領域チェック（３位まで）

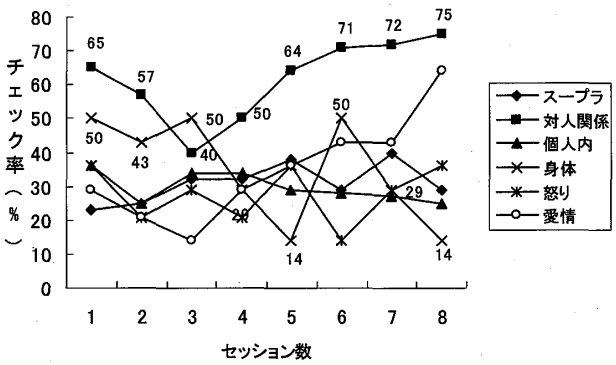

図３　青年期チェック傾向（５位まで）

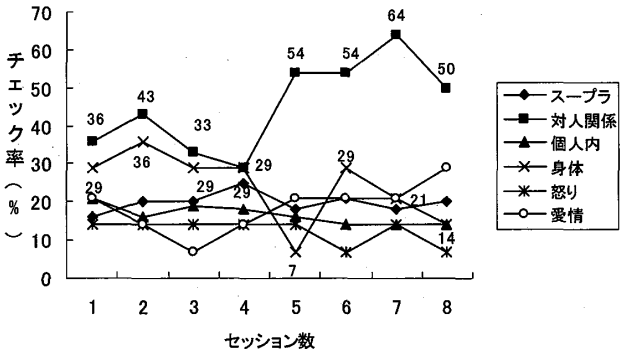

図４　青年期チェック傾向（３位まで）

た.

図5はC子の安全空間体験質問紙の結果である．C子は，全セッションにおいて身体を1位〜3位の間で心的安全空間体験として認知していた．かつ，対人関係領域であるセラピストとメンバーの両項目をチェックしているとき，#7では愛情を，#8では怒りを心的安全空間体験として認知した．そのため，身体の心的安全空間を取り出すための，青年期の典型事例としてC子を選出した．

C子の全セッションにおける自己身体接触行動をカテゴリー別に表1に，領域別のパーセンタイルを図6に示した．

C子のチェック項目数とスープラ領域，対人関係領域へのチェック，および，身体接触のパターンをセッション毎にみると，#1では心的安全空間質問紙は6項目，スープラ領域で1項目，対人関係領域2項目をチェックした．自己身体接触行動は，手領域への比重が高いものの，全ての領域への接触が見られた．#2，は2項目，#3では4項目チェックされたが，両セッションともスープラ領域，対人関係領域ともにチェックされず，このときの自己身体接触行動のパターンは#2では腕領域が7割近く，#3ではそれが8割を占め，質問紙に連動して自己身体接触に現れる心的安全空間も多様性が見られなかった．#4では，8項目チェックされ，スープラ領域に2項目，対人関係領域に2項目チェックされた．自己身体接触は腕領域が3割に低減し，手領域のほかに胴体領域が2割を占めるようになり，それ

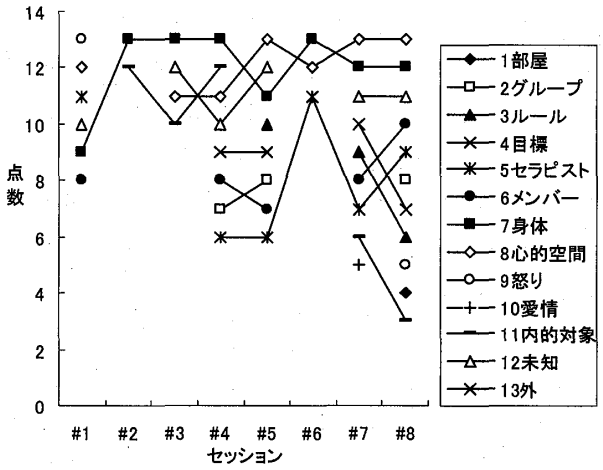

図5　C子心的安全空間質問紙推移

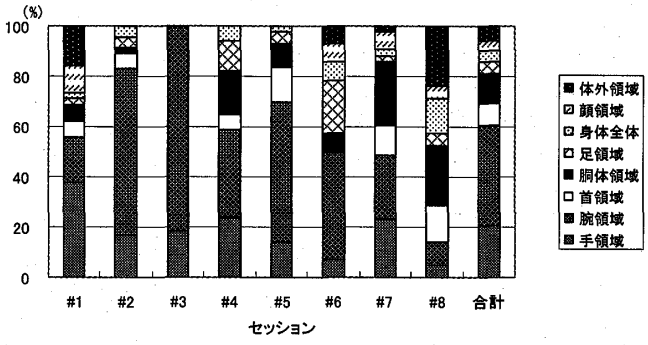

図6　C子セッション別身体接触パーセンタイル

表1　観察カテゴリーセッション別身体接触行動推移

	手領域	腕領域	首領域	胴体領域	足領域	身体全体	体外領域	合計
各領域の接触場所	手と指	腕	首	胸+肩+腹	足全体	身体がふらふら，もぞもぞ動く	椅子	
#1	17	8	3	3	1	1	7	45
#2	8	31	3	1	2	2	0	47
#3	2	9	0	0	0	0	0	11
#4	4	6	1	3	2	1	0	17
#5	6	24	6	4	2	1	0	43
#6	1	6	0	1	3	1	1	14
#7	10	11	5	11	1	1	1	43
#8	1	2	3	5	1	3	5	21
合計	49	97	21	28	12	10	14	241

*1発話中に現れた行動を1つの表出回数としてカウントしている。

以外の領域での接触もみられ，多様性が増した．#5でも，8項目チェックされ，スープラ領域へのチェック数が3項目に増え，対人関係領域においても2両項目チェックされたが，自己身体接触のほうは，再び腕領域が6割近く占めるようになり，手領域，首領域，胴体領域がそれぞれ1割程度みられたものの，多様性も腕領域に偏った形となった．#6では3項目のみチェックされ，スープラ領域にチェックがみられず，対人関係領域ではセラピスト1項目にチェックされただけであったが，自己身体接触は腕領域が4割強となったが，足領域への接触が2割強に増え，多様性はみられた．#7で9項目とチェック数が増え，スープラ領域の2項目がチェックされ，対人関係領域でも2項目チェックされた．このとき，自己身体接触は，手領域，腕領域，胴体領域がそれぞれ20%台となるなど，ひとつの領域に偏らない多様性が見られた．#8で11項目と最もチェックされる項目が多様化し，スープラ領域4項目全て，対人関係領域2項目全てがチェックされた．自己身体接触も，腕領域が1割と最も少なくなり，胴体領域や体外領域として椅子への接触が増えるなど，多様化した．心的安全空間質問紙にチェックされる項目が多様化し，スープラ領域もしくは対人関係領域の項目がチェックされたセッションにおいては，自己身体接触に現れる身体に対する心的安全空間も連動して多様化することが，#6を除き，確認されたことから，作業仮説2-2-1は，おおむね支持された．

4. C子の自己身体接触に現れる身体に対する心的安全空間の多様性が増したのは，#7と#8であり，心的安全空間質問紙における個人内領域の「愛情」は#7で，「怒り」は#8でチェックされた．それらのセッション内のC子のアイデンティティを追求する姿を，セッションの概要として以下に記載する．

#7

男性のコ・リーダーと別の女性メンバーを中心に「愛と孤独」について語られる中，C子は「家族という絶対的な愛があるから，孤独でもいいんじゃないかと思って今まで来た」「でも，家族もばらばらになっていくから愛を求めていかなくてはいけない」と首や胸を接触しながら語る．女性のメインリーダーから愛について聞かれて，C子は「帰って来る港」「ここに戻ってくれば絶対に安全だと思える場所」と語り，メインリーダーに男っぽいと言われて，C子は「そういうところもある．女っぽいウジウジした部分もあるけれど」と，腕を接触しつつ応える．C子は「自分も家族は持ちたいが，恋愛とか（女性としての）一歩がすごく重い」と首と肘を触りながら語り，「（女性に対して）ネガティブなイメージ」などと繰り返し語る．最後に，別のメンバーが純粋な愛について語ると，C子は苛立って「全てを純粋に愛することは難しい」と胸の下のほうを触りながらジェスチャーも伴って反応し，「純粋に愛されないと考えると怖くないか?」と聞かれてC子は求めに行かないのは怖いからで，諦めもある，と腿や肘を触りながら語る．

#8

他のメンバーがグループのメンバーや自分のことが好きだと語っていると，C子はその話を聞いて，「前に出て行くのが好きだが，自分が好きというか，傷つくのが嫌だから抑えてきたけれど，本当は話すのが好きで，人も好き」と語る．このとき，口を触ったり，首元や胸，腹などあちこち触り，最後はジェスチャーを交えて話す姿が観察された．メインリーダーから＜家族以外にも興味を持てるようになりましたか?＞と問われると，C子は「興味を持たないようにしていたのがもったいない」と腕に手を置いて答える．メインリーダーが＜家族について絶対的な愛ばかりを語るのを聞くとそんな家族がいるだろうかと思う＞と伝えると，C子は「それは分からない」といってどこにも接触せず，ぴしゃんと答えるが，メインリーダーから表

出されている怒りについて指摘されて,「怒っていますね，ちょっとね」と椅子に手をかけて，脚をふらふらとさせながら，どこか落ち着かない感じで答える．コ・リーダーから，怒ることが怖かったのか，傷つくと言っていたことは，怒る体験のことだったかと，問われて,「怖かったのかもしれない」と認める．このときには，身体全体がふらふらと揺れ，椅子や首を触り，肩などの胴体領域への接触が見られた．そして家族をグループに引き連れてきたことを，どこにも自己身体接触をせず，しっかりとした口調で語った．

#7では，C子は異性愛への希望を語りながらも，求めにいくことの怖さや諦めも同時に語り，家族の愛から，異性愛への移行で葛藤が見られた．愛情のエネルギーを意識してアイデンティティの探索が行われると，女としての自分のウジウジした部分も浮上し，同時に，求めることの怖さにも触れた．その間中，自己身体接触の多様性も見られた．

一方，#8では，自己愛の高まりと，他者への関心が見られ，精神内的な関心と，対人関係的レベルでの関心について，口，首元，胸，腹などの多様な部位を接触しながら語られた．また，C子の家族についてメインリーダーとやりとりする部分では，家族について絶対的な愛ばかりを語ることへの疑問を呈されると，その意味を検討することなく怒りを表出する退行的な側面が見られたが，表出された怒りを指摘されると，それを認め，コ・リーダーから怒る体験と傷つく体験が同じであったのかと解釈されて，怖かったのかもしれない，と自分を客観的に見て，内省するプロセスも見られた．このときにも，多様な部位への自己身体接触が見られた．家族について退行的な側面を見せながらも，精神内的な怒り，対人関係的な興味など多様な内容について語りながら，積極的に自分とは何かを探索していた．

すなわち，自己身体接触に表れる身体に対する心的安全空間の多様性が増した#7，#8では，心的安全空間質問紙において個人内領域である「怒り」と「愛情」の項目がチェックされ，かつ，セッション内において，自身の怒りや愛情のエネルギーをアイデンティティ追求に向けて探求する姿が見られたことから，作業仮説2-2-2は支持された．

5. 考　察

本研究では，身体が人格発達に資する葛藤への取り組み作業に対する心的安全空間として重要な役割を果たし，それがどのように質的な変化を遂げ，多様化するのかを明らかにすることが目的であった．そのための理論仮説1「青年期のアイデンティティ追求において，身体の心的安全空間は重要な土壌となる」は作業仮説1-1-1が支持されたことから，支持された．また，作業仮説2-1-1は部分的に，2-2-1はおおむね支持され,2-2-2は支持された．そのため,理論仮説2「身体の心的安全空間は，心的安全空間の階層性が成立することにより，多様化し，さらに，そのサブシステムである個人内領域の心的安全空間も拡大する.」はおおむね支持された．

青年期にとっては，部屋，グループ，ルール，目標といったスープラ領域よりも，セラピストやメンバーなどの対人関係領域，すなわち，人が，心的安全空間体験として認知されると，怒りや愛情が安全に感じられるようになることがわかった．その背景に，青年の課題として同輩集団への対象移行を遂げることだといわれているように（Blos, 1962)，親からの自立，友人との親密な関係など，発達課題としても大人や同輩集団を意識させられることも影響していると考えられよう．

さて，身体項目がエネルギー領域のように，上位領域と連動しなかったものの，C子の事例からは，セラピストやメンバーが安全だと認知されているとき，自己身体接触が多様化した変化がみられ，またそのセッションではアイデンティティの探求が，怒りや愛情のエネルギーを使って積極的に行われたことがみられた．つまり，自

己身体接触に現れた体に対する心的安全空間は多様化していたのであり，ここに心的安全空間の階層性を見るのである．すなわち，自己身体領域に見られた心的安全空間の拡大は，アイデンティティの探求に助けになったと考えられる．

しかし，2-2-1の作業仮説がおおむね支持されたにとどまった理由は，#6が質問紙のデータからの心的安全空間体験認知の低さと，自己身体接触の多様性が連動しなかったためであった．これは，#6でのやりとりの中でC子が「外側に置かれていかれてるような感じがして，話しているときに，自分がうまいこと入っていけない感じがする．自分が流れに流されてどうしていいかわからないで流されている人みたい」とグループの中での安全感のなさについて言及できていることからも，逆説的にグループには安全感を体験していた可能性がある．このときの自己身体接触は多様性が見られ，それを示すかのように，安全空間体験質問紙で最も安全と感じたのは身体項目であった．すなわち，グループの中で，安全感そのものの作業がなされた時の体験の揺れを質問紙では捉えきれない限界の一つを示していると考えられるのである．その意味でも，今回用いた事例は，自己身体接触・安全空間の体験のダイナミックな変化をグループプロセスとの関連を検討するためには必要であった．しかし一方で，検証の一般性においては限界があるため，本研究で得られた知見をより一般的なものとするためにも，複数事例研究を検討することは今後の課題であろう．

加えて，本研究では，青年期の人格発達に資する葛藤への取り組み作業において身体性が心的安全空間として果たす機能を検討したものであるが，自己身体接触という表出行動は，あくまでそのごく一部であり，本来は身体性をいかに本事例がアイデンティティとして組み込んできているのかという点について，より詳細に検討されるべきである．本研究では，その一端を観察によって明確に取り出すことを目的とするに留まるものである．また，それが自己身体接触行動によく表れたことは，本事例のC子が身体同一性においては偏りのある事例であることも言えるであろう．実際そのことは，フォローアップ面接において，身体を使うことや意図してケアをすること，身体を通じて自分を愛することにおいては無頓着に放ってきていたことが確認されている．そのような本事例特有の個人力動を含めた検討も，今後必要であろう．

また，身体は全く生物学的で現実的なものであるだけに，男女の差異によっても，その意味は違ってくることも考えられるだろう．本研究でとりあげたような自己身体接触行為そのものは，比較的女性に多く自然に見られる可能性も考えられる．女性にとっては，身体は男性と同様に生物学的なものであり物理的なものであると同時に，思春期以降の大きな変化を経て，象徴物としての意味がより大きくなるところがある．身体的な意味での完全な児童期は，男児に比べて女児は短い場合が多く，思春期の身体変化も，男児は比較的自分自身の問題あるいは仲間うちの問題として，安全にゆっくりと体験しやすいが，女児の身体の変化は，大人や異性など外の世界に影響を及ぼしやすいし，その結果として，外からの刺激を受けることも多く，自己から遊離して感じられてしまうことにもなりかねない．身体同一性そのものに対する安心感や安全感を感じていなかったC子は，自己身体接触行為ということを通じて，身体自己に象徴された自己愛や自我感覚，退行に対する歯止めを自己身体接触によって確認し，そのエネルギーを撤退から前進へ変換するためのスペースとした．必ずしも身体同一性として身体を自分のものとして根付かせていたわけではなかったC子が，それでもなお身体を，自己身体接触行為という小さな心的安全空間を通じて，揺らがない心的安全空間として機能させ，それを多様化させて拡大させた．すなわち，この経験を通じて，女性としての身体を自分のものとしていく青年期的作業に実際に取り組み始めたわけである．身体は，多くの青年期男女にとって，自分がそれまでに培ってきた人格の諸機能がもっとも安全に集約されたものとして，大きな挑戦に立ち向かうと

き，いろいろな形で，撤退から前進へのエネルギーの変換のための心的安全空間として機能するものと考えられよう．

6. 結　論

本研究は，青年が自身のアイデンティティを追求し人格構造全体を再体制化する過程で，それまでに培った性愛性や攻撃性のエネルギーに対する主体性を再構築するために，身体が重要な役割を示すことを，実際の事例を通じて明らかにした．格段に自己同一性，自我同一性を飛躍させる青年期においては，退行への力をとどめ，新世界への恐れや不安から撤退することなく留まり，成長に向けて前進する過程で，様々な心的安全空間を質的・量的に拡大し，深化させることが必要である．本事例では，そのような揺らぎの時期に，最も安定した心的安全空間のひとつとして身体が機能することによって，そのスープラシステムの心的安全空間は拡大し，同時に，個人内の心的安全空間を拡大することが示された．

参考文献

Anzieu, D.(1985). *Le Moi-peau.* BORDAS.(福田泰子訳 (1993). 皮膚自我 言叢社 .)

Blos, P.(1962). *On Adolescence.* The Free Press of Glencoe, Inc.(野沢栄司訳 (1971). 青年期の精神医学 誠信書房 .)

Bowlby, J.(1969). *Attachment and Loss.* Vol.1. The Hogarth Press.(黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子訳 (1977). 母子関係の理論 岩崎学術出版社 .)

Frued, A. (1958). Adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child, 13*, 255-278.

Gendlin, E.(1996). *Focusing-Oriented Psychotherapy.* Guiforld Press.(ジェンドリン ,E. 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子監訳 (1996) フォーカシング指向心理療法 (上) 金剛出版 .)

橋本和典・秋山朋子・中村有希・小谷英文 (2003).「青年期アイデンティティ・グループ」に関する研究 (3)　健康な人格構造の査定調査法の開発　日本心理学会第 67 回大会発表論文集 , 306.

James, T.,Hoshino, S.,Katsumata, A.,&Hara, H. (2006). A Time-Limited Group Psychotherapy Targeted for Hikikomori (Social Withdrawal) Male Adolescents. 7th Pacific Rim Congress for International Group Psychotherapy and Group Processes.

ジェイムス朋子 (2007a). 女性の「青年期アイデンティティ・グループ」における攻撃性の分化と主体性の獲得 - 怒りに関わる多様な心的安全空間体験の意味 - 日本集団精神療法学会第 24 回大会発表論文集 , 23.

ジェイムス朋子 (2007b). 社会恐怖を呈した青年期女性の心理療法過程の検討 日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集 , 67.

狩野力八郎 (1990). 青年期の特徴 : 精神分析学の観点から 臨床精神医学 , 19, 733-737.

Kotani, K.(2006).Group Psychotherapy as a means of Creating Safe Space beyond Cultures. a Symposium Lecture for "Group Psychotherapy" at the 19th World Conference of Psychotherapy in Kuala Lumpur on 24 August 2006.

小谷英文 (1993). ガイダンスとカウンセリング―指導から自己実現への共同作業― 北樹出版 .

小谷英文 (1995). 精神分裂病を中心とした慢性的精神障害者の集団精神療法―基本枠組みと技法基礎― 集団精神療法 ,11, 127-136.

小谷英文・中村有希・秋山朋子・橋本和典 (2001). 青年期アイデンティティグループ - 性愛性と攻撃性の分化統合を中核作業とする技法の構成 - 集団精神療法 ,17, 27-35.

小谷英文 (2005). 心の安全空間 至文堂 , 23-36.

小谷英文・佐柳信男・中村有希・川村良枝・武野顕吾・髭香代子・栗田七重・雨宮基博 (2005). 心的安全空間の概念化とその測定基盤の検討 総合保健科学 : 広島大学保健管理センター研究論文集 21, 7-18.

Morris, D. (1977). Manwatching Elsevier International Projects Ltd, Oxford.

西村馨 (2007). 小学生に対する心理教育グループの課題 , デザイン , 実践 . 教育研究 ,49,1-10.

Reich, W.(1931). Character Formation and the Phobias of Childhood. *International Journal of Psycho-Analysis,12*, 219-230.

Ritvo,S.(1971). Late adolescence – Developmental and clinical considerations. *Psychoanalytic Study of the Child, 26*, 241-263.